サーベイ論文

物語的説明モデルの原型としてのヘンペルモデル

苗村 弘太郎*

Hempel's model as a prototype of narrative explanation model

Kotaro NAMURA

§1　はじめに

本稿の目的は，「歴史における一般法則の役割」（Hempel 1942）を，近年の物語的説明に関する論争との関連から紹介することである．この論文は，歴史学における説明の分析の先駆けとして知られる．Hempel は D-N モデルの提唱者として知られるが，この論文においても，D-N モデルとほぼ同様の議論を前提に歴史学における説明の分析を行っている．詳しく述べると，科学的説明は，説明される言明（被説明項）と説明を与える言明（説明項）からなる．説明項は初期条件の記述と一般法則からなり，説明項から被説明項を演繹することが説明である．このような枠組みを歴史学の分析に適用した Hempel の議論は多くの批判を呼び，1950 年代から 60 年代にかけて，歴史学における説明に関して盛んに議論が行われた．この時期以降，歴史学における説明に関しては放置されたままの状態が長く続いていたが，近年，Danto（1965）が提唱した物語的説明モデルを出発点として分析を再開しようという機運が高まりつつある[1]．その中でも，Hempel の議論は問題設定のために引き合いに出されている．

しかし，このような近年の議論において，Hempel（1942）は公平に紹介されているとは言い難い．この論文は，科学の統一性という観点から，自然科学における説明の分析を強引に歴史学に適用した論文として紹介されてしまうことが多い[2]．例えば，Roth（2018）は Danto（1965）による物語的説明の定式化を紹介しながら，歴史学における説明の分析にとって，Danto の指摘は現在でも重要であると主張している．その中で Roth が述べるところによると，Hempel（1942）は，歴史学においても自然科

* 京都大学大学院文学研究科　博士後期課程　kou.namura@gmail.com

[1] Kuukkanen（2015）, Roth（2017）など．

[2] Hempel に否定的な紹介としては，Roth（2018）, D'Oro（2008），好意的な紹介としては，MacDonald and MacDonald（2008）などがある．

学と同様，因果関係を説明するには一般法則が必要だと主張している．だが，自然科学における一般法則に相当するものを，歴史家の行う説明から取り出すことはほとんど不可能であり，それゆえ歴史学に真正の説明はないということになる．このような Hempel の主張に応答するため，Danto は物語的説明モデルを定式化し，歴史学に特有の説明様式が存在すると論じたとされている[3]．

このような紹介は，誤りとは言えないものの，Hempel の主張の急所をうまく捉えられていないと言わざるを得ない．確かに，Hempel 自身が認めるように，彼のモデルに従うと，歴史学における説明のほとんどが真正の説明でなくなってしまう．しかし，当該箇所で彼が主張しようとしていることは，そうだとしても，明らかに経験的根拠を欠く説明を排除するためならば，彼のモデルは有用であるということである．歴史学が科学として未熟だという点に彼の主張の力点があるわけではない．

また，Hempel のモデルは Danto のモデルと不適切に対比されているように見える．Roth（2018）によると，Danto が定式化した物語的説明とは，後世の関心から物事が展開する過程を追跡することであり，そこでは法則に類するものは役割を持たない[4]．だが，この紹介は，Danto が Hempel の主張の一部を引き継いでいることを見落としている．Hempel（1942）のポイントの一つは，事象の個別性を記述するだけでは，歴史学においても説明は不可能だという点にある．これを認めると，何らかの一般法則が説明に必要であることを受け容れざるを得ない．Danto はこれらの点を認めている．

このようなわけで, Hempel の議論の内容には再確認の余地がある．Danto と Hempel の主張の関係については鹿島（2006）が既に簡潔かつ適切に紹介を行っているが[5]，近年の議論の文脈を踏まえ，Danto が Hempel からどの論点を引き継いでおり，どのような論点に Danto の独自性が見られるのか，より詳しく確認することには価値があるだろう．結論の要点を先取りすると，彼らの決定的な相違点は分析の焦点にある．Hempel の分析が説明の成果としての歴史記述に向かうのに対し，Danto の分析は歴史家が説明を行う過程をも含んでいる．Danto の独創性はこの点にこそ存在する．

本稿は次のような構成を取る．まず，二節において，Danto（1965）の物語的説明モデルを紹介する．これは近年の議論において，特に Danto による定式化が参照されるためである．次いで三節において，Hempel（1942）の議論を紹介する．四節において，両者の議論を比較し，両者の共通点，相違点がどこにあったのかを明らかにしたい．

---

[3] Roth 2018, p. 10.

[4] Roth 2018, p. 25.

[5] 鹿島 2006, pp. 35-38.

§2 Danto の物語的説明モデル

歴史学における説明については，Hempel の分析に対する批判という形で 1950 年代から 60 年代にかけて盛んに論じられた．その反論は大きく二種類に分けることができる[6]．第一が，Dray（[1957]1960）に代表されるような，人間の行為の内的な理解を重視する立場である．この立場によると，人間の行為を説明するために一般法則を参照する必要は必ずしもなく，説明対象の人間が行為した際の推論を合理的に再構成し，歴史家自身がその推論を再実行（re-enact）することによってこそ，行為は説明される．第二が，説明の分析にあたって，歴史家が生み出す物語（narrative）に注目する立場である[7]．この立場の中で最も頻繁に参照されており，近年の物語的説明をめぐる議論（Roth 2017 など）においても引き合いに出されるのは Danto（1965）である．このことから，本稿では Danto（1965）の議論を取り上げ，Hempel（1942）の議論を評価するための比較対象とする．

Danto の議論の紹介に入る前に，「物語」（narrative）という概念の多義性に言及しておく．鹿島（2006）は，「物語」という語が，物語るという行為の「過程」の意味と「所産」の二つの意味を持つことを指摘し，両者を区別することを提案している[8]．彼が指摘する通り，Danto による説明の分析は所産としての物語に対してだけでなく，物語を語るという行為の過程にも向けられていることに注意が必要である．

Danto（1965）の Hempel への反論の骨子は，「物語を語ることも『説明の一様式』(a form of explanation)[9] として認めるべきである」と要約できるだろう．Hempel によると，説明とは初期条件と一般法則から被説明項を演繹することに限られる．しかし，日常的な場面で「なぜ」という問いに答えるために，人々が行うのはそのようなことではないだろう．むしろ，「なぜ」という問いに答えるために人はしばしば物語を語る．例えば，警察官に呼び止められ，「こんな夜遅くになぜこんな場所にいるのか」と尋ねられたなら，その場所に来ることになった経緯を語ることになるだろう．

歴史家も同様であると Danto は論じる．「封建制の崩壊」や「ナショナリズムの勃興」などのように，原因を特定することが難しい変化に歴史家はしばしば直面する．

---

[6] Mink [1968] 1987, p. 122. この時期の論争に関する紹介としては伊勢田（2009）も参照のこと．

[7] この立場として言及されるのは，White（1963; 1966）, Gallie（1964）, Danto（1965）である．彼らの立場の共通点や相違点については，Dray（1971）や Mink（[1968]1987）を参照．

[8] 鹿島 2006, p. 9.

[9] Danto 1965, p. 141, 251.

彼によると，このような場合に，変化の原因を説明するために歴史家が行うことは，変化の始点と終点を一般法則によってカバーすること（すなわち，初期条件と一般法則から結果に関する言明を演繹すること）ではない．むしろ，変化の始点と終点の間を埋めていくことであり，その間に何が起こったのかを物語ることである．

このような，変化を説明するために歴史家が物語を構成するプロセスを Danto は分析しようとする．まず，歴史家が説明しようとしている変化は，最も単純な形では次のように表現できる．

E: t_1 において x は F であり，t_3 において x は G である．

x とは変化の主題であり，t_1 から t_3 にかけて主題が変化していることをこの文は記述している．Danto によると，変化の記述には，変化を通じて変わらない主題が存在する．彼が例として取り上げるのは，チャールズ皇太子とスペイン王女の婚約に賛成していたバッキンガム公爵が，なぜ態度を変えたのかをイギリスの歴史家 Trevelyan が説明している箇所である[10]．ここで Trevelyan が関心を持っている変化は次のように記述できる．

E_1: t_1 においてバッキンガム公はスペインとの婚約に賛成していたが，t_3 においてバッキンガム公はスペインとの婚約に反対していた．

この記述にはバッキンガム公という主題が存在し，皇太子の婚約に対する彼の態度の変化が表現されている．このような変化の記述が歴史家にとっての説明の対象となる．

このような変化を説明するため，歴史家はこの変化を説明するような出来事を t_1 と t_3 の間から探し出し，記述を挿入していく．最も単純な場合を想定して，変化の間に挿入される記述は一つだとしよう．その記述は「t_2 において x にしかじかのことが起こった」と表現できる．バッキンガム公の例では，例えば次のような記述が挿入されうる（実際の叙述はもっと複雑である）．

E_2: t_2 においてバッキンガム公はスペインでの宴席で無礼な待遇に腹を立てた．

このようなプロセスを通じて，少なくとも 3 つの時点に言及する時系列の記述が形成されるはずである．Danto によると，それは次のような構造を取る[11]．

[10] Danto1965, pp. 234ff.

[11] Danto 1965, p. 236.

（1）t_1 において x は F であった．
（2）t_2 において x に H が起こった．
（3）t_3 において x は G であった．

この出来事の系列の記述には，「始点（beginning）」（1），「中間（middle）」（2），「終点（end）」（3）という物語の最小単位の構造が存在していると Danto は言う．

このような物語を語ることが説明になっていると Danto は主張する．彼によると，（1）から（3）への変化が被説明項を形成し，（2）が説明項となっている．先の例では，E_1 の変化に関心を持った歴史家が，その変化の間に E_2 を挿入する時，次のような物語が形成される．

（1）t_1 においてバッキンガム公はスペインとの婚姻に賛成であった．
（2）t_2 においてバッキンガム公はスペインでの無礼な宴席の待遇に腹を立てた．
（3）t_3 においてバッキンガム公はスペインとの婚姻に反対であった．

この物語において，被説明項となっているのは（1）から（3）への変化（すなわち E_1）であり，説明項となっているのが（2）（すなわち E_2）である．つまり，物語の構造は全体として変化の説明となっている．このような構造を持つ物語を構成することを「物語的説明」（narrative explanation）と Danto は呼ぶ．

ただし，このような物語を語ることがなぜ説明となるのかに関してはもう少し議論が必要である．上の物語における「中間」はどのような出来事でもよいわけではない．その種類の出来事が起こった場合，「始点」から「終点」への変化が生じるような出来事である必要がある．つまり，しかじかの種類の事象には続いてしかじかの事象が起こるという，ある種の一般法則が物語的説明には前提されている．詳しくはすぐ後に述べるが，この一般法則は厳格な裏付けを持たないものでも構わないと Danto は考える．バッキンガム公の例では，「プライドの高い男は無礼な扱いによって態度を変えやすい」といったある種の法則が前提されているために，「無礼な扱い」が中間として機能していると思われる．

Danto によると，このような「中間」が発見されるのは，どのような「中間」が変化を説明するかという事後的な関心から，一般法則と一般概念を用いて．歴史家が「中間」を探すからである．バッキンガム公の例では，歴史家は「プライドの高い男」であるとか，「敏腕な政治家」といった一般概念を念頭に置きながら，婚姻に対する態度の変化を起こしそうな出来事を探す．その一般概念と一般法則から変化が生じそうな

出来事が発見されると，「中間」として選択される．この例では，「プライドの高い男」としてバッキンガム公を見た場合，無礼な態度には影響されやすいといった一般法則が考えられる．「無礼な態度」にあたる出来事を探した結果，スペインで開催された宴席において，バッキンガム公が無礼な扱いを受けて腹を立てたという出来事が発見されるのである．結果，出来事は説明に適した形で記述される．このような記述は，どのような「中間」が変化を説明するのかという事後的な観点があるからこそ可能であることを Danto は強調している[12]．

このように，説明にはある種の一般法則が前提されていると Danto は主張している．裏を返すと，歴史学における説明は事象の個別性の記述に留まることはできないと彼が考えていたことを意味する．事実，歴史学とは事象の個別性を記述する学問であり，何らかの一般法則による説明は行わないという立場を彼は批判する．彼によると，この立場を取る者は，歴史学を自然科学と対比する．自然科学が自然現象の一般的なふるまいを法則として記述するのに対し，歴史学は人間の精神を扱い，人間の個別性を記述する．この立場によると，なぜ特定の行動をある人物がとったのかという問いに答える際，歴史家は一般法則によって「説明」を行うことはしない．なぜならば，人間は一般法則に従って行動しないからだ．むしろ，歴史家は，研究対象となる人物の個別性を記述し，その人物の精神に共感することで，なぜその人がそのように振る舞ったのかを「理解」（Verstehen）しようとする．このような作業は一般法則による「説明」とは異なるということになる[13]．このような立場を Danto は批判する．彼によると，共感による理解が成立しているように見える場面でも，実際には何らかの一般法則や一般概念が用いられている．理解が成功しているように見えるのは，説明において用いられている一般法則があまりに自明であるためであり，一般概念による記述が無ければ，なぜ変化が起こったのかという問いに答えることは不可能である[14]．

ただし，一般法則の意味するところは Hempel のそれとは異なっていることに注意が必要である．Hempel によれば，説明に用いられる一般法則は経験的に確証されている必要があり，それによって予測が可能である．その一方で，Danto のいう一般法則には，自明の理（truism）ともいうべき，日常生活で用いられる一般化までもが含

[12] Danto 1965, pp. 234f, p. 248. Danto は，後の出来事との関連から先行する出来事を記述するような文を物語文（narrative sentence）と命名している（Danto1965, Chapter8）．物語文は，後続の出来事が起こった後にしか用いることができないという特徴を持つ．上の例では，スペインでの宴席を，なぜバッキンガム公は態度を変えたのかという観点から記述することは，宴席の時点では不可能である．

[13] Danto 1965, pp. 205f.

[14] Danto 1965, p. 242.

まれている[15]．彼によると，このような一般化は，何世代にもわたって物事を説明する中で我々の文化に受け継がれてきたものであり，歴史家が自由に扱えるわけではないが，ことさらに確証の必要もない．また，その自明さゆえに，このような一般化によっては中身のある予測はほとんど可能にならないことを Danto は強調している[16]．説明には一般概念による記述とある種の一般法則が必要になるという点まで Danto は Hempel に同意している．だが，その一般法則に Hempel ほどの厳密さを求めることには Danto は否定的である．

このような物語的説明はいわば基本形であり，より複雑な形へ拡張することもできる．上のような三つの文からなる物語を Danto は「物語原子」（atomic narrative）と呼ぶ．物語原子の連鎖を構築することで，より大きな変化を説明することや，変化を複数の原因によって説明することも可能になると彼は論じる[17]．

このようにして構成される物語の特徴を整理し直すと，次の 3 点に集約できる[18]．以下，これらを順に見ていこう．

（a）変化を通じて同一の主題について語っている
（b）主題の変化を説明している
（c）主題の変化の説明にとって必要な記述が過不足なく含まれている

（a）変化を通じて同一の主題について語っている

物語的説明には主題が存在する．上の例においては，（1）―（3）の文はバッキンガム公爵（の皇太子の婚姻に対する態度）という主題を共有していた．裏を返せば，物語的説明は無関連な主題を持つ文の集まりとはならない．例えば，次のような文の集まりとなることはない．

> ナラム・シンがシッパルに太陽の神殿を建てた．次に，フェリペ三世がモリスコを追放した．その次に，ウルキーサがブエノスアイレス軍をセペーダにて撃破した．次いで，アーサー・ダントーが 1961 年 10 月 20 日 7 時の目覚ましで目を覚ました[19]．

[15] Danto 1965, pp. 221-223.
[16] Danto 1965, pp. 243f.
[17] Danto 1965, p. 241.
[18] Danto 1965, pp. 249ff.
[19] Danto 1965, p. 117.

この記述に一貫した主題が存在しないことはすぐに見て取れるだろう．それぞれの文の主題は，古代メソポタミア，17 世紀初頭のスペイン，19 世紀の南米，20 世紀後半のアメリカであり，時間的に空間的にも連続性を見出すのが難しい．物語の主題には何らかの連続的同一性（continuous identity）が要求されるのである．

（b）主題の変化を説明している

物語的説明の基本形は，「始点」，「中間」，「終点」の構造を持ち，「中間」が「始点」から「終点」への変化を説明していた．大きな変化を説明する場合，この基本形を組み合わせた物語が構成され，始点から終点まで一連の変化のステップが形成されることで，最終的に「始点」から「終点」への変化が説明されることになる．変化のそれぞれのステップは，自明の理とも呼ぶべき，ある種の一般法則に照らして自然なものとなっている．

（c）主題の変化の説明にとって必要な記述が過不足なく含まれている

歴史家は変化を説明する際に，「始点」から「終点」への変化を説明するような「中間」を挿入することによって，物語を構成する．歴史家はこの過程で，変化の説明に関わる事象を，変化を説明するような仕方で記述しなくてはならない．むろん，実際には歴史家は叙述の中に余計な情報を挟むが，説明するために物語を語る場面に関する限りでは，関連のない情報を挟むことは説明にとっては妨げとなる．それゆえ，その産物としての物語には，変化を説明するために必要な情報が含まれているはずであるし，不要な情報は含まれていないはずである．

以上の（a），（b），（c）の特徴を持つ Danto の物語的説明モデルは，Hempel のモデルが表現できなかった説明の様式を捉えていると結論できるだろうか．（c）に注目する限り，被説明項と説明項とが結び付けられる根拠は，一般概念による記述と一般法則にあり，Hempel が説明に要求している条件と大差ないように見える．この問いには，Hempel（1942）を次節で詳しく見た後，四節においてもう一度立ち返ることにしよう．

§3 「歴史における一般法則の役割」

自然科学における説明の分析が歴史学に対しても適用できると Hempel（1942）が主張したことは広く知られている．だが，Hempel がそのように主張した目的はあまり紹介されることがない．彼の議論を注意深く検討すると，説明の分析を歴史学に適用す

る目的を二つ読み取ることができる．第一に，Hempel が冒頭の 1 節で述べている論文の目的は，歴史学は個別性を記述する研究であるという主張へ反論することである．第二に，議論を通じて彼が強調しているのは，因果関係に関する「真正の（genuine）説明」と「疑似的な（pseudo）説明」の区別が彼の議論によって可能となることである．

第一の点から見ていこう．この論文は全体として 8 節から構成されているが，2 節において，歴史学における因果関係に関する主張には一般概念が不可欠であり，歴史学は純粋に事象の個別性を記述する研究ではありえないと論じている．その足がかりとして，自然科学における説明の分析を Hempel は提示している．この分析は後の D-N モデルとよく似たものになっている．彼によると，ある E という種類の事象（event）を説明することとは，E の原因を示すことであるという．$C_1 ... C_n$ という種類の事象が原因となって，E という事象が起こったと主張するのは，それらの事象に続いて E という種類の出来事が起こるという一般法則が存在すると述べることに等しい．説明は次の二種類の言明から構成される．

（1）$C_1 ... C_n$ という種類の事象がある時ある場所で起こったという言明
（2）それらの言明から，E という事象の発生が論理的に導出できるという普遍的な仮説

この説明モデルの例として，夜の冷え込みによってバイクのラジエーターが破損したと説明する事例をあげている．ラジエーターの中に雨水が溜まっていたという言明と，夜中に気温が氷点下まで低下したという言明，および，水は氷点下を下回ると体積が膨張するという一般法則から，ラジエーターの破損が導出される．このように，初期条件に関する言明と一般法則に関するを説明項として，被説明項となる言明を論理的に演繹することが科学的説明が持つべき論理構造なのである．

Hempel が説明の論理構造を提示した後に強調するのは，説明においては，事象は一般概念の下で記述されるという点である．例えば，「水が 0 度を下回った」における「水」は一般概念による記述となっている．彼によると，この点は歴史においても同様である．なぜなら，個別的な出来事（event）を完全に記述し尽くすことは不可能であり，ましてや，個別的な出来事のあらゆる特徴を一般法則によって説明することなどまず不可能だからである．彼はこう結論する．

> どちらも [歴史学も自然科学も] 一般概念の下でしか主題を説明する（give an account of）ことができないのであり，歴史学が「一回的な個性を把握する」と

いっても，それは物理学や化学に可能なことと差はないのである（no more than and no less than can physics and chemistry）[20].

つまり，Hempel が自然科学における説明モデルを持ち出すことで強調したかったポイントの 1 つは，歴史学が因果的説明に関わる以上，歴史学は出来事の個別性の記述に留まることはできないということだったのである．

このような主張に対して，当然予想されるのが次のような反論である．すなわち，歴史学の目的は出来事に因果的な説明を与えることだけではなく，説明以外の実践においては出来事の個別性を記述することが重視されるのだという反論である．この点については部分的に認めているが，周到な再反論がいくつか用意されている．その一つは，7.3 節に見られる[21]．この箇所において Hempel は，社会制度の歴史学的な研究に言及する．社会制度の研究ではしばしば，制度の発展の歴史をいくつかの段階へと分けることに重点がおかれている．この作業は説明ではなく単なる記述として想定されがちであるが，このような作業にも因果的説明が隠れている．制度の発展をいくつかの段階へ分けて記述するといっても，あらゆる事象に言及することはできない．つまり，歴史家は何を記述するかに関する取捨選択を強いられている．その際に選択されるのは，制度の発展にとって重要な（relevant）事象だけである．そして制度の発展にとって重要であるとは，まさに制度の発展の原因であるということである．一見すると発展の過程をいくつかの段階に分けるだけに見えても，実際には因果的説明を前提しているからこそ事象を取捨選択できているというわけである[22].

この論文の第二の目的は，彼の枠組みに従って，「真正の（genuine）説明」と「疑似的な（pseudo）説明」を区別することにあった．彼が疑似的な説明と呼ぶのは，例えば，「民族の歴史的運命」のような曖昧な概念を用いた説明である．このような説明は曖昧であるがゆえに経験的にテストに耐えないことを彼は問題視した．

Hempel によると，説明を経験的にテストすることは，それが予測として機能するか

[20] Hempel 1942, p. 37.（[ ] 内は筆者による補足）

[21] なお，7.3 節を含む二箇所において，Mandelbaum（1938）の 6 章から 8 章までが参照されている．参照先の箇所で Mandelbaum は，歴史事象の重要性（relevance）とは他の出来事と因果関係が存在することであると主張しており，同様の主張をしている論文としてマックス・ウェーバーの「マイヤー批判論文」（Weber [1906] 1967, pp. 266-290）を挙げている（Mandelbaum1938, p. 259）.

[22] この論点は近年の議論とも関わっている．例えば，Hewitson（2014）や保城（2015）は，人間の行為や文化を解釈し記述することは，それ自体として意味を持つというよりも，因果的説明にとってこそ重要性を持つのだという立場を取っている．一見ただの記述に見える作業にも，因果的説明が隠れているという Hempel の指摘はこのような主張に有利に働くと思われる．

を確かめることによって可能である．なぜなら，彼によると，科学的予測は科学的説明と全く同じ論理構造を持つからである．例えば，日食の説明に用いられる初期条件と一般法則は，予測にも同様に用いることができなければならない．

むろん，歴史記述を Hempel のモデルにしたがって再構成してみたとしても，このような意味で経験的に裏付けられた法則は見つからないことを彼は 5.2 節で認めている．彼によると，歴史記述は説明のための初期条件や法則を曖昧に示す「説明スケッチ」に留まり，十全な説明となるためにはさらなる経験的な研究により補われる（filling out）必要がある．しかし，その場合でも，科学的に受け入れられる説明スケッチと疑似的な説明は区別されるとする．例えば，「民族の歴史的運命」といった曖昧な概念を用いた説明は，どのような経験的な証拠によってテストされるのかも不明であり，さらなる研究によって補われる余地もない．このような疑似的な説明は非経験的だとして，彼はそれを歴史研究から排除しようとする．

また，Hempel によると，説明項と被説明項を明確にすることで，何が説明されているのか取り違える誤りを防ぐことができる．より詳しく述べると，抽象的な一般法則によって，抽象的な記述しか説明されていないのに，具体的な記述が説明されているかのように誤解することを防ぐことができる．例えば，地理的な条件や経済的な条件が人々の道徳規範の一般的な傾向に影響を与えるといった主張がなされることがある，ここではより具体的に，寒冷な気候の地域では勇敢であることが尊ばれるという一般法則が判明したと仮定しよう．さらに，とある寒冷な地域では決闘に応じないことは恥だという道徳規範が存在すると仮定しよう．この時，この道徳規範の詳細までが気候によって説明されると考えるのは Hempel に従えば誤りである，なぜなら，寒冷な気候という記述と一般法則からは，「勇敢であることが尊ばれている」という非常に抽象的な記述しか帰結しないからだ．Hempel によれば，説明項や被説明項がどの程度の一般性で記述されているかを明確にすることで，何が説明されているのか誤解することを防ぐことができる．

このように，Hempel（1942）の議論は単に自然科学における説明モデルを歴史学に適用したものでは決してない．まず，この論文の冒頭でなされている主張は，歴史学は常に出来事の個別性の記述に留まることはできないというものであった．この主張については，因果的説明においては一般概念の下での記述が必要になるという点だけでなく，因果的説明が歴史学において重要性を持つという点までもカバーした周到な議論が展開されていた．これはこれまであまり紹介されてこなかった論点である．また，歴史学における説明が自然科学における説明と同様の構造を持つべきという主張

も，その力点は，歴史学を未熟な研究と評価することではなく，彼のモデルが歴史研究における説明の洗練に貢献するということにあった．具体的には，経験的な研究による裏付けが難しいような説明を「疑似的な説明」として排除することや，説明において記述の一般性が一貫しないという混乱を解消することを彼は提案していた．

§4　Danto のモデルの新規性はどこにあったのか

Hempel（1942）のこのような主張を踏まえた時，Danto（1965）は Hempel に対する反論に成功したと言えるだろうか．言い換えるならば，Danto は Hempel とは異なる様式の説明モデルを提出したと言えるのだろうか．上で見た Hempel の主張を踏まえた時，Hempel と Danto の主張の類似性が際立つのも事実である．Hempel が説明モデルによって主張していたことの一つは，歴史学においても因果的説明には一般概念と一般法則が必要となるため，歴史学は事象の個別性を記述することに留まることはできないという点であった．Danto も同様に，一般概念なしに因果関係を説明することは不可能だと主張していた．また，Danto は変化を説明する物語を構成するにあたっては，変化を説明する事象が選択されると述べていた．この主張は，歴史事象の選択にあたって因果的説明が重要な役割を果たすという Hempel の議論と共通する部分を持っている[23]．

しかし，だからといって物語的説明に関する Danto の主張が Hempel に対する反論になっていないとは言えない．両者の分析には二点の相違が見られる．第一に，一般法則の確証にどれほどの厳密さを求めるかという点において違いが見られる．Hempel によれば，説明には一般法則が必要であり，その一般法則は経験的によく確証されており，それによって予測が可能になるようなものでなくてはならない．一般法則が確証されているか（されうるか）を確かめることにより「疑似的な説明」を歴史学から排除することを Hempel の議論は目指していた．それに対して，Danto によると，経験的な裏付けがなされていない自明の理（truism）によっても説明は可能である．そのような自明の理は予測を可能にするものでなくてもよい．少なくとも，法則に Hempel の主張するような厳密さを求めることに Danto は否定的である．

[23] 実は Danto は，物語において出来事が他の出来事と関連性（relevance）を持つとは，他の出来事と因果関係を持つことであると主張している（Danto 1965, Chapter7, 特に pp. 129-142）．この主張を真に受けると，Hempel の議論はまさしく Danto の主張に有利な材料を提供しているように見える．むろん，Dray（1971）が指摘するように，このような論理的に強い主張は受け容れ難いのだが，出来事の選択の規準として Danto が因果関係を重視していた点は留意されてもよい．

第二の対立点はより決定的である．それは，何を説明と捉えているか，および，何を分析の対象とするかである．Hempel にとって説明とは，二つの事象の因果関係を主張することであるが，Danto にとって説明とは，なぜしかじかの変化が起こったのかという問いに答えることである．両者は似て非なるものである．Hempel は説明とは因果関係の主張であると考えため，歴史研究の中からそれに相当するものを見つけ出して分析しようとする．結果，彼は歴史研究の成果である歴史記述に注目し，その中から因果関係に関する記述を見出し，その記述が彼のモデルに沿った構造を持つはずだと主張することになる．それに対して，Danto は「なぜしかじかの変化が起こったのか」という問いに答えることが説明だと考え，歴史家がこの問いに答える過程に注目する．結果，彼のモデルは，所産としての物語の構造だけでなく，物語を構築する過程を含んだものになっている．

説明とは「なぜ」という問いに答えることだという前提を受け入れるならば，Danto のモデルは Hempel のモデルとは異なる様式の説明を捉えていると言えるだろう．物語を語ることは，初期条件と一般法則から事象に関する記述を演繹することとは全く異なった種類の行為である．その結果を見たときには，類似する論理構造に分析できたとしても，行為としてその過程を分析すると両者の様式は全く異なるのである．

このような様式の違いに注目したことで，Hempel が見落としていたものを Danto のモデルは捉えているようにみえる．物語的説明においては，主題の変化を説明するような仕方で，変化の過程から事象を選び出し，説明に適した形で記述する必要がある．そうでなければ，歴史家は説明をうまく果たすことができない．これは歴史家が行う説明の重要な側面であると言ってよいだろう．だが，このような側面は Hempel の説明モデルでは十分に捉えきれない．Hempel によれば，説明とは演繹的な議論を構成することであり，いくつもの事象に一貫した記述を与えるといったことは彼のモデルに含まれていない．説明においてある種の一般法則が役割を果たしている点は指摘できているものの，歴史学における説明という実践の重要な側面を見落としてもいる．

まとめると，因果的説明が歴史学において重要であり，因果関係を説明するにはある種の一般法則と一般概念が必要になるという点において，Danto と Hempel は一致している．だが，説明における一般法則は厳密な意味で確証されている必要があるとは Danto は考えておらず，説明に用いられる法則によって内容のある予測が可能になるとも考えていなかった．また，Hempel が歴史記述が持つ理想的な構造として説明モデルを提示したのに対し，Danto は歴史家が変化に説明を与える過程をも含めたモデルを与えていた．Danto からすれば Hempel は法則に厳密さを求めすぎており，歴

史家が説明する過程で行うことを見落としていることになる．全体としては，Danto は Hempel の主張を引き継ぎつつも，一部は弱い形で受け容れ，一部は補完していると見ることができる．

それにも関わらず，Danto の議論が Hempel の議論と相容れないかのように紹介されるのはなぜだろうか．このような観点に立つと，近年の議論では，物語的説明における一般法則の役割が軽視されていることが指摘できる．例えば，Roth（2018）は Danto の定式化に依拠して物語的説明を紹介する中で，物語的説明と一般化による説明とを区別している[24]．Roth によると，物語的説明は因果的説明になりうるが，それは，出来事を法則によって連結しているためではない．むしろ，「事後的にしか不可能な形で出来事を記述し，前の出来事が後の出来事の出現となるのはどのようにしてであるのか説明を与える（give an account）」[25] ことによる．だが，一般化を利用せずに説明を行うことは不可能だという点については，Danto は Hempel に同意していた．したがって，一般化を利用せずに説明を行うことはいかにして可能なのかという問いが浮上してくるが，この問いに Roth は満足な回答を与えていない．Danto に従って，物語的説明も一般化を用いると考えるならば，Roth の主張するように物語的説明を一般化による説明と区別することは難しくなる．確かに，歴史家が後世の関心に沿うように出来事を記述しながら説明を行うということは物語的説明の分析に特有の指摘である．しかし，因果的説明にはある種の一般法則が必要になるという Hempel の主張を Roth は十分評価できないないように見える．この主張を Danto が引き継いでいることを見落としているため，Hempel を過小評価するばかりか，物語的説明に関する Danto の議論を不適切に理解してしまっている可能性すら指摘できるだろう．

§5　まとめ

本節ではこれまでの議論を再び整理する．Hempel（1942）は二つの主張を持っていた．これらの主張は Danto（1965）の観点からは次のように評価される．第一の主張は，因果的説明に関わる以上，歴史学は事象の個別性の記述のみに留まることはできないというものであった．この点は Danto の見解と一致する．第二の主張は，歴史学においても，Hempel の説明モデルによって，説明が経験的に裏付けられているかを判断できるという点にあった．具体的には，因果関係の主張に前提されている一般法則が

[24] Roth 2018, p. 22f.

[25] Roth 2018, p. 23

経験的に確証されているか（されうるか），また因果関係の主張が演繹的な推論として再構成できるのかを確かめることで，疑似的な説明を排除できると Hempel は考えていた．この点に対しては Danto は対立する主張を打ち出している．まず，Danto によると，因果関係を説明する際に歴史家が参照するのは，経験的に確かめられた一般法則ではなく，日常生活でも用いられる自明の理である．この意味で Danto は Hempel の厳格な規準には同意していない．また，Danto のモデルは Hempel の見落としているものを捉えてもいる．説明の成果としての歴史記述の構造を分析する Hempel に対して，Danto は歴史家が「なぜ」という問いに答えるプロセスをモデル化していた．このモデルによると，変化の始点から終点までの物語を構築することによって歴史家は変化を説明する．物語を構成する出来事は自明の理に照らして次のステップへの変化が帰結するように記述される必要がある．このような点は歴史家が説明を行うために重要な要件でありながら，Hempel のモデルでは捉えきれない．

Danto のモデルに照らしてみると，Hempel の議論が見落としている点は少なくないが，そうだとしても，科学の統一性という観点から歴史学における説明は不完全だと論じたという紹介は一面的にすぎる．むしろ，Danto の議論にとっても重要な点を Hempel は指摘している．具体的には，因果的説明においては一般概念の下での記述と規則性に関する知識が不可欠である点，それゆえ歴史学は事象の個別性の記述することに留まることはできないという点，および，事象の選別において因果的説明が重要性を持つという点である．これらの点を見落としているために，近年の議論における Danto の理解が不適切になっている可能性が指摘された．したがって，Danto の分析を今後の議論に繋げていくためには，これらの論点を見過ごすべきではない．この意味で，Hempel（1942）が重要な指摘を果たしていることは評価されてよいだろう．

参考文献

Danto, Arthur. 1965. *Analytical philosophy of history.* Cambridge: Cambridge University Press.

Dray, William H. [1957] 1960. *Laws and explanation in history.* London: Oxford University Press.

Dray, William H. 1971. On the nature and role of narrative in history. *History and Theory* 10(2), 153-171.

D'Oro, Giuseppina. 2009. Historiographical understanding. In *A companion to the phi-*

losophy of historiography, ed. Tucker Aveizer, pp.142-151. Malden MA: Blackwell.

Gallie, Walter. B. 1964. *Philosophy and the historical understanding.* London: Chatto&Windus.

Hempel, Carl G. 1942. The function of general law in history. *Journal of philosophy* 39, 35-48.

Hewitson, Mark. 2014. *History and causality.* New York: Palgrave Macmillan.

Kuukkanen, Jouni-matti. 2015. *Postnarattivist philosophy of historiography.* New York: Palgrave Macmillan.

MacDonald, Graham and Cynthia, MacDonald. 2009. Explanation in historiography. In *A companion to the philosophy of historiography,* ed. Tucker Aveizer, pp.131-141. Malden MA: Blackwell.

Mink, Louis O. [1968] 1987. Philosophical analysis and historical understanding. In *Historical understanding,* eds. Fay Brian et.al., pp.131-141. Ithaca and London: Cornell University Press.

Roth, Paul A. 2017. Essentially narrative explanations. *Studies in History and Philosophy of Science Part A* 62, 42-50.

Roth, Paul A. 2018. Reviving analytical philosophy of history. In *Towards a revival of analytical philosophy of history: Around Paul A Roth's vision of historical sciences*. ed. Brzechczyn Krzysztof, pp.9-27. Boston: Brill-Rodopi.

Weber, Max. [1906] 1967. Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik. In *Gesammelte Aufsatze zur wissenschaftlehre von max weber*. ed. Winckelmann Johannes, pp.215-290. Tübingen: J.C.B. Mohr.

White, Morton. 1963. The logic of historical narration. In *Philosophy and History.* ed. Hook Sidney, pp.1-31. New York: New York University Press.

White, Morton. 1966. *Foundations of historical knowledge.* New York: Harper & Row.

伊勢田哲治. 2009. 「歴史科学における因果性と法則性」『岩波講座哲学 11　歴史/物語の哲学』95-119 頁. 東京：岩波書店.

鹿島徹. 2006.『可能性としての歴史：越境する物語り理論』東京：岩波書店.

保城広至. 2014. 『歴史から理論を創造する方法：社会科学と歴史学を統合する』東京： 勁草書房.